つける。

粘土　お玉じゃくし

ぬりゑ　ひなげし

前週鋏仕事にてこの材料をきりあつかつてゐるので、その花の色、葉の色なぞ幼兒には容易にぬる事が出來る。

第八週

自由畫　自在　一回

年長組の自由畫を見る　一回

年長組の自由畫を保育室の壁間にならべて見せる。

粘土　自在　一回

鋏仕事　金魚

お玉じゃくし同樣に金魚を保育室に飼養する。幼兒が金魚を日頃觀察して切り紙として形をつくらせる。チューリップ、ひなげし、お玉じゃくしなぞと異り少し形のきりにくいものであるが、幼兒は比較的簡單にするものである。

ぬりゑ　きんぎょ

幼兒に色なぞ自由にぬらせる。

年長組、第一保育期

—滿五歲、滿六歲—

生活訓練

第五週

この週では食事の時の注意が行はれる。食事のことは、

年少組の時から既に幾度も注意され來つてゐることであるが、年長組となつて一段と自分で出來ることは自分でする習慣をつけたい。そこで、今までは先生に注いで貰つてゐたお湯を自分で注ぐといふことにさせる。實をいへば、幼兒等はもつと早くから、そうして見たかつたに相違ない。しかしあぶないとか、こぼすといけないとか、なんのかのと止められてゐたのである。その意味では、解禁といつてもいゝ此の動作は、たゞ、湯の注ぎ方といつたやうな輕い意味のことでなく、幼兒の獨立感へ一歩を進めるものであるに相違ない。但、この訓練を初めるに就ては、やかんなり、ごびんなりの大きさとか形とか、殊に注ぎ口の具合をよく注意して置かなければならない。少しでも具合の悪い、持ちにくい、注ぎにくいもので、それをこぼさぬやうにしろといつても無理である。

湯を自分で注ぐことが出來れば、そろ〳〵友達のためにも注いでもいゝであらう。人のためのサーヴィスとしては、こゝらが一番何氣なく出來ることであらう。この何氣なくといふのはサーヴィスの極意であつて、人にも何氣なく見えると共に、自分にも何氣ない心もちでするのである。自分の茶碗へ注ぐ序に、その前でも後でも、近くの友達のへ注ぐ。いやごうも恐縮々々といつて貰ふ譯でもなし、一つおつぎ致しませうとお世辭で出る譯でもなしに、何氣なく注ぐのである。カラの茶碗へ注ぐだけのことである。斯ういふ心もちから、必ずしも湯注ぎ當番などといふ職名をつけなくともよからう。お湯一つ注ぐのに當番の辭令を貰ふのも仰山なことだし、職務上でなければしないといふ風な氣分を、少しでも養つては却つて面白くない。

一寸茲で、幼兒の訓練ではないが序に一口横からのぞいて見たいのは、幼稚園のお湯である。ごみがあつたり、少しでも變な嗅ひがしたり、若しそんなお湯だつたら、注ぐのもたのしみでなからう。これは、先生の方で、小使さんではない。先生の方でよく氣をつけて頂きたい。

同時にも一つ。やくわんなり、ごびんなりをぢかに机の上に置く風、あれも是非やめたい。お盆なり、ごびん敷きなり、ちゃんといゝものがある筈である。あのぬれたのをそのまゝ机の上に置いて、そこらに水溜りをつくつたり、

丸い跡をつけたり。いやはや。

第六週
第七週

こゝの二週が空白になつてゐるのは、訓練休業とか、無訓練週間とかいふものでは勿論ない。一體、各週へ何彼と割りあてゝあるのもその週にきまつた意味でなく、そこらで注意を促して其の後斷えず注意をつゞけることゝしてゐるのである。訓練に休みなし、とは訓練のそも〳〵の祕訣である。

第八週

ピアノ・オルガンをいたづら彈きせぬといふことは、一寸、他の訓練事項と違つてゐるが、これは何も、樂器が大切だからといふだけの理由ではない。こうした、先生の使ふ備品を濫りにいぢらないといふことが、全體として訓練意義をもつのである。大人のものを構はず無暗に手を觸れるといふことは、極く幼少のものなら仕方ないとして、年長兒にもなれば、可なりのわきまへがあつていゝ筈である

特に、樂器は調律の正しく出來てゐるものである。そこらも、それ〴〵分つてゐていゝ筈である。樂譜にあはせて正しく彈くのでなく、たゞ鳴らして遊ぶのでは、樂器と玩具との別を誤つてゐるものである。

但、こゝに議論の起りそうな點は、幼兒に樂器を勝手に使はせることは、音樂趣味をおのづからに養ふことで、寧ろ奬勵したいと言ふ反論である。勿論、それも目的として異論はない。併し、だからといつて、先生用の樂器と幼兒用の樂器とは、必ずや區別せられてゐる筈である。そういふ筈である。そういふ目的から幼兒用の樂器の提供されることに就て異議はない。たゞ、先生の樂器をおもちゃ扱ひさせてはならない。先生のといふのは、正しい音律を常に大切にしてゐなければならぬ樂器といふことである。

こゝでまた一つ添へ言をいふ。それは、幼稚園の樂器そのものゝことである。といへば直ぐ皆さんにもお分りのことゝ思ふが幼稚園のピアノ、オルガン位調子の狂つてゐるものは少なくない。第一、初めから學校のお下がりの古ものであつたり、幼稚園創設何十年來の寶物であつたりする。

それもいゝが、調律がこんこ行き屆いてゐない。折角く先生の名手を以てしても、キーがこころ〳〵氣が拔けてゐたり、ゆるんでゐたりしたのでは、樂器の尊嚴を損するここ甚だしい。そういふ狂つた調子が、音樂教育―耳の訓練によくないのは言ふまでもないが、それ以上、生活訓練によろしくない。況んや、そんな、自ら己れを侮つてゐるやうな、調子はずれの樂器を濫りにさわるべからずが滑稽になるかも知れない。「こわれもの注意」なら別の問題ですが。

誘導保育案

第五週

商店のいろ〳〵

商店の外廓は漸く目鼻のつく位になつたので、この週あたりから內容卽ち品物の製作に移る。

同種の品を澤山作つたり、又はいろ〳〵の種類を拵へたり、こ言ふ樣な事は、子供だけでは、なか〳〵やり終せない事が多いので、多くの助言や、實際の手傳もかなり加へなければならぬ。

第六週

消防署

直ぐ近くなので、みんなで見に行つてもいゝ。階下は大きな間口あり、その中に赤の消防自動車が二三臺置いてある。二階には小窗があり、更に其上に高い梯子段があつて、その上に火見櫓があり、火見番が始終廻つて四方を見渡してゐる樣子は本校の庭からもよく見られる。之は協同の製作にしてもよし、又希望の人に作らせてもいゝ。やはり、深さのあるしつかりした空箱があるなら、それを利用するのが一番いゝこ思ふ。中の火事自動車も、小形の空箱を工作して出來上らせるのが簡單でしつかりこ出來る。

自動車、電車

街を通る自動車、電車、之も空箱利用が一番しつかり出